

氏名	齊藤由佳
学位の専攻分野の名称	博士（教育心理学）
学位記番号	甲文第181号（文部科学省への報告番号甲第638号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2017年9月8日
学位論文題目	双極性障害における「簡易な心理教育」の考案とその有用性に関する研究
論文審査委員	（主査）教授 小野久江 （副査）准教授 佐藤寛 松見淳子（関西学院大学名誉教授） 平井みどり（神戸大学名誉教授）

論文内容の要旨

双極性障害は、抑うつ状態または躁状態からなる気分エピソードと症状がない寛解期を長期にわたって繰り返す精神障害であり、伝統的診断分類では躁うつ病として知られている。双極性障害は稀な疾患ではなく、平均発症年齢も25歳と比較的若いにもかかわらず、疾患認知度が低く、このことが治療の障害となることが多い。特に、寛解期に、患者判断で治療が中断され病状の再発を来すことが临床上大きな問題となっている。この問題に対し、心理療法と教育的介入を統合した治療的援助活動である心理教育を薬物療法と併用して治療することが着目され、スペインでは2名の心理専門職が8-12名の患者に対し90分のセッションの講義を21回行い双極性障害の全体像について学ぶという高度に体系化された集団心理教育プログラムの臨床研究も行われている。しかし、日本の日常臨床において、海外で研究されているような高度に体系化された心理教育プログラムは実施困難である。そこで、本博士論文の執筆者である齊藤氏は、まず調査研究を行い心理教育の必要性を確認した後、日本の日常臨床でも実施可能な新たな心理教育プログラムを考案し「簡易な心理教育」と名付け、双極性障害患者の寛解期治療におけるその有用性を検討し本論文としてまとめている。

本論文は、全部で3章から構成されている。第1章は序論として双極性障害を軸として組み立てられている。まず、双極性障害の全体像について、その概念、歴史的変遷、疫学、併存疾患、病因、診断、分類、経過・予後、治療が、アメリカ精神医学会や日本うつ病学会などの見解のみならず、文献研究から得られた最新の研究成果を基に説明される。その後、問題点として、日本の日常臨床においては、双極性障害の寛解期治療として高度に体系化された心理教育プログラムは実施が困難であること、また寛解期の必須治療である薬物療法の継続を目的として行われている服薬指導にも困難が生じており医療心理学的介入が期待されていることが提示され、本研究論文の目的・意義へとつながられている。

第2章では、4つの研究成果が述べられている。研究1は双極性障害の発症年齢層に近い大学生を対象とした双極性障害の認知状況の調査である。対象者の半数以上が双極性障害の疾患名を知らず、加えて双極性障害において極めて重要な問題である再発や自殺リスクの高さ、躁状態の治療必要性が十分に認識されていない現状が示される。

研究2は、双極性障害患者5例のケースシリーズ研究である。氏はその臨床実践と文献研究から、患者と心理専門職が対面で疾患に関するテキストを交互に音読で読み合わせる新たな教育プログラムを考案し「簡易な心理教育」と名付け、その有用性を5例の双極性障害の寛解期患者にて検討している。なお使用されたテ

キストは、日本うつ病学会が患者とその家族が双極性障害を正しく理解することを目的として作成した「双極性障害（躁うつ病）とつきあうために」（日本うつ病学会，2013）であり、このテキストには、双極性障害の症状、治療、原因、診断、研究といった幅広い内容が分かりやすい語彙を用いて9項目に整理されて解説されている。「簡易な心理教育」を行った5例に共通して見られた傾向として、疾患理解が進むのみならず社会適応が改善することが、記述的および国際的にも信頼性と妥当性が高い評価尺度である Clinical Global Impression-Severity Scale (CGI-S) や Internal State Scale (ISS) をもって報告された。研究3では、研究2の5例の中から、双極性障害の診断に至るまでに20年以上を要した複雑な治療経過をもつ症例における「簡易な心理教育」の有用性が取り上げられる。症例の詳細な検討の結果、音読による読み合わせという要素と心理専門職との一対一で行うという要素が、患者の疾患理解を深めるとともに、心理専門職との信頼関係を構築する上で重要であると示された。

研究4は、「簡易な心理教育」の手法を、双極性障害患者の服薬指導に応用した症例が報告されている。服薬指導を通じた患者経過の詳細な検討から、単に薬物療法の知識の習得が可能となっただけでなく、治療に対する積極性の促進や薬剤師との信頼関係の構築などの心理的な支援にもつながった結果が示された。なお、本研究においても国際的に信頼性と妥当性の高い The Brief Evaluation of Medication Influences and Beliefs (BEMIB) が患者の服薬アドヒアランスの評価に使用された。

第3章では、総合考察として上記4研究を踏まえて考察が進められる。まずは、双極性障害における心理教育の必要性が考察された。情報技術が進化した現在の日本においても、またそれらの情報技術を駆使して情報を入手することの多い成人若年層においても、双極性障害の寛解期における心理教育の必要性は、他国や他世代と同様に必要であることが主張された。さらに、長期間にわたり精神科治療を受けており、すでに基本的な疾患知識を有している患者の中には、より専門的な説明を含んだ心理教育が有用な患者が存在し、それに応える専門的内容の心理教育の必要性も主張された。続いて、「簡易な心理教育」の手法と内容についての考察がなされた。音読での読み合わせを一対一で行うという2要因が、認知の点からもコミュニケーションの点からも有用であったとの考えが述べられ、「簡易な心理教育」の技法は患者と心理専門職の信頼関係構築に寄与し、適切な人間関係の在り方を学ぶきっかけになり、それを通じて患者の社会適応の改善という臨床的に重要な結果につながりうると論じられた。これらから、結論として、日本の日常臨床における双極性障害の寛解期の心理教育としては、海外で行われているような時間や人的資源をかけた高度に体系化した心理教育プログラムでなくとも、患者にも医療者側にも時間的かつ経済的に負担が少ない心理教育プログラムが有用である可能性が高いと提案された。さらに、この手法は疾患そのものの心理教育にとどまらず、服薬指導に取り入れることが可能であり、今後さらに日常臨床の場にも貢献するものであるとの主張がなされ、本論文が結ばれている。

論文審査結果の要旨

齊藤由佳氏の博士論文研究は、近年その重要性が注目され始めている双極性障害の寛解期における心理教育の方法論に関し、氏が研究の基盤とする医療心理学の知見に基づき、臨床現場において具体的に行われた実践研究の報告である。

双極性障害は、うつ病相期、躁病相期、寛解期を周期的かつ長期的に繰り返す精神障害であり、寛解期を維持することが治療の目標とされ、薬物療法の長期継続が必須である。しかし、寛解期に患者が治療の自己中断をし、病状が悪化する症例も少なくない。そこで、寛解期の治療として薬物療法に加え精神療法を併用することが推奨されており、なかでも心理教育が注目されている。海外においては、高度に体系化された集団心理教育プログラムの双極性障害の寛解期における無作為化対照試験などの臨床研究が行われ、その有用

性の科学的根拠が蓄積されつつある。なお、医療心理学における心理教育とは、科学的根拠をもった疾患関連事項を患者の個性や関係性を配慮しながら伝え、心理的および社会的な側面の改善を図ることを目的とした治療的援助活動である。

齊藤氏は、高度に体系化された集団心理教育プログラムの有用性を理解しつつも、日本の医療保険制度などを考慮すると、日常臨床においては時間的にも人的にもまた医療経済的にも実施困難であることを主張した。そして、患者にも医療関係者にも負担が少ない心理教育プログラムを新たに考案し、「簡易な心理教育」と名付けた。「簡易な心理教育」は、診察の待ち時間の約20分を利用し、日本うつ病学会が作成した患者向け双極性障害の解説書をセッション数を固定せずに患者のペースに合わせて患者と心理専門職が交互に声に出して読むという緩やかに体系化された個人心理教育である。この着想は、氏が鋭い観察眼で患者の立場に立った実践研究をしていたことや、構音活動による文章理解の促進などに対する文献研究を着実にやってきた成果であると考えられる。

齊藤氏は、本博士論文で4つの研究結果を報告している。研究1は、本邦初の若年成人層を対象とした双極性障害の認知状況の調査研究であり、日常臨床のみならず疫学的にも貴重な情報を提供したといえる。研究2は、寛解期の双極性障害患者5例に「簡易な心理教育」を実践したケースシリーズ研究である。医療における研究には倫理的配慮はもちろんのこと、患者や医療関係者の協力を得る必要があり、膨大な労力を必要とする。その中で5例の症例から得られた「簡易な心理教育」の有用性の報告は、貴重な情報を日常臨床に提供するものである。研究3では、20年以上うつ病として治療をうけてきた症例の特性を考慮しながら「簡易な心理教育」の有用性に関する具体的な知見が症例報告として提供された。海外でもその国の医療実態や患者特性に合わせた心理教育の工夫に関する研究が注目されており、本研究は日本における新たな取り組みとして評価され外国雑誌に掲載された。研究4は、「簡易な心理教育」の手法を双極性障害患者の服薬指導に応用した画期的な研究であった。患者は薬物療法の知識が増加しただけでなく、治療に対する積極性が促進し、さらには薬剤師との信頼関係を構築するに至るなど、心理的な支援につながる事が示された。本研究は、ファーマシューティカルコミュニケーション学会にて高く評価され、今後の研究進展が期待されている。なお、本博士論文研究では、研究2から研究4において、テキスト内容の理解度評価、Clinical Global Impression-Severity Scale (CGI-S) による専門家の病状評価、Internal State Scale (ISS) による患者の病状把握評価、The Brief Evaluation of Medication Influences and Beliefs (BEMIB) による服薬アドヒアランス評価が用いられ、その結果が継時的に示されており、双極性障害の寛解期において「簡易な心理教育」の手法による臨床的対応が望ましいことが示唆された。

本博士論文は、国際学会3回を含む専門学会4回での研究発表と、外国雑誌2編を含む査読誌計4編の論文をまとめたものである。また、齊藤氏は本博士論文研究にいたるまで、中枢神経領域の薬物療法に関する無作為化比較試験などの研究を行い、その成果を国際学会4回、外国雑誌4編を含む計18編の論文として公表している。氏はこれらの研究におけるプラセボ効果の高さなどから医療心理学的介入の重要性に着眼し、本博士論文研究に着手したものである。これらの研究業績からも分かるように、氏は臨床研究の意味を十分に理解した上で、実験的な環境で得られる臨床試験データが平均的集団における治療の有用性を検討することに対し、実践研究における事例の記述的検討が不確実性に満ちている双極性障害患者の治療の有用性を検討することに必要であるとの判断の下に本博士論文研究を行った。その姿勢は、患者の個性に対する配慮を取り戻そうとする近年の医療心理学分野の研究姿勢として十分に評価できるものとする。

しかしながら、齊藤氏の研究には問題点もある。まず、双極性障害は長期にわたる維持療法が必要であることに鑑み、選択された方法論について丁寧な説明がなされたかという点においては不十分さが残る。また、記述的検討のみならず実験的臨床試験データも同時に検討できればより妥当性の高いものになったと考える。しかしながら、氏の研究が医療心理学に基盤を置く学際の実践研究であることを考慮すると、これらの問題

点が博士研究論文としての価値を大きく下げるものではない。なお、氏は2015年3月から製薬企業でクリニカルリサーチサイエンティストとして国際的に活躍しており、今後益々、医療心理学的視点をもつ科学者として社会や学会活動に貢献していくことが期待されている。

齋藤氏は2017年7月29日に博士論文の公開発表を本学F号館で行った。また同年8月5日開催された口頭試問では、双極性障害には薬物療法が必要であることや寛解期には心理教育の併用が望ましいことがあらためて丁寧に説明された。その上で、氏が考案した心理教育プログラムである「簡易な心理教育」と患者の社会適応や服薬アドヒアランスの改善の因果関係について、多岐にわたる視点から時間を割いた質疑応答が行われた。その結果、実践研究から得られた患者の個別性を重視した研究成果の日常臨床における意義を審査委員全員が認め、氏が博士たるにふさわしい研究能力を有していることを確認した。以上より、我々審査委員は、口頭試問の結果および学会や臨床研究における諸活動から総合的に判断し、齋藤氏の研究成果と研究者としての能力が、博士（教育心理学）の学位を授与するに相応しいとの結論に達したので報告する。